



Prevalence of retinopathy and its risk factors in a Japanese population

著者名	福嶋 清香
発行年	2013-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10470/30329

主論文の要旨

Prevalence of retinopathy and its risk factors in a Japanese population

(日本人における網膜症の有病率およびリスク因子について)

東京女子医科大学第三内科学教室
(主任：内潟安子教授)
福嶋 清香

Journal of Diabetes Investigation 第4巻 第4号 349頁～354頁

(平成25年7月7日発行) に掲載

【要 旨】

糖尿病網膜症の重要な所見である毛細血管瘤、点状・斑状出血、軟性白斑、硬性白斑等は非糖尿病患者にも存在するが、明白でない。今回日本人非糖尿病既往者における、上記所見の存在とその危険因子を明らかにし、有病率から糖尿病診断基準値の妥当性を検討した。

対象者は2006年に埼玉県済生会栗橋病院の健診を受診し以下に該当する1,864名。①空腹時血糖値(FPG)とHbA1c値が完備、②眼科専門医2名の年2回眼底写真評価が一致した者、③貧血および心血管疾患非既往者。非糖尿病既往者のFPGとHbA1c値で5群に分類し、糖尿病既往群とを合わせた6群で網膜症所見の割合を算出し、ロジスティック回帰分析を用いて本所見の危険因子を解析した。網膜症所見を有した非糖尿病既往者は4.2%。非糖尿病既往者における網膜症所見の危険因子は、単変量回帰では年齢、SBP、FPG、HbA1c。年齢、SBP、FPGを説明変数とした多変量回帰ではFPGのみが、また年齢、SBP、HbA1cを説明変数とした多変量回帰ではSBPとHbA1cのみが有意な危険因子であった。年齢とSBPで調整後の網膜症所見の割合は、FPGならびにHbA1c最低分位群に比べてFPG 7.0 mmol/L以上群、HbA1c 6.5%以上群で有意に上昇しており、網膜症有病率の観点からの糖尿病診断基準値として妥当と思われた。